

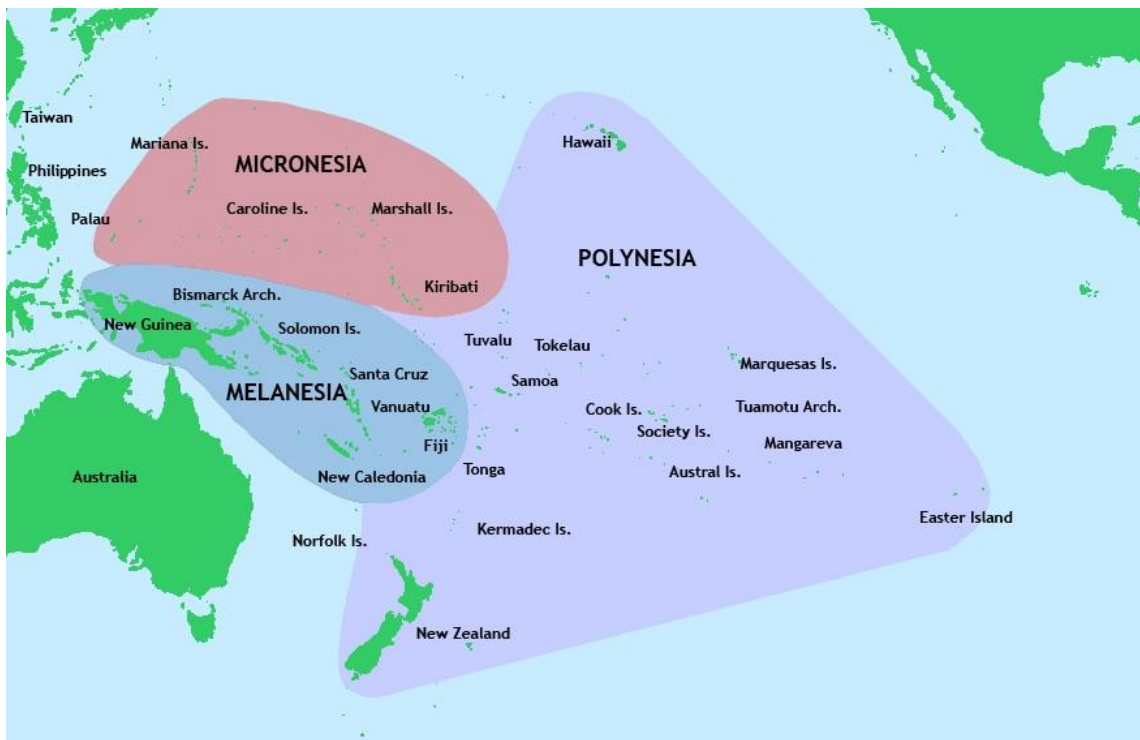
ミクロネシア連邦（FSM）ってどんな国？！

近くて遠い太平洋の島々

国際部 中原健一郎

皆様、太平洋にはいくつかの島国があるかご存知ですか。パラオ、マーシャル諸島、ミクロネシア連邦、キリバス、ナウル、ソロモン諸島、パプアニューギニア、フィジー、バヌアツ、サモア、トンガ、ツバル、クック諸島、ニウエの14か国があると言って良いでしょう。

というのは、日本は上記全ての国を国家承認していますが、多くの国がまだ承認していない“国”もあり、それに加えてご存知ハワイにグアムやサイパン（アメリカ）、米領サモア、リゾートとして人気が高いニューカレドニアやタヒチ（フランス）、モアイで有名なイースター島（チリ）、これらに加えてオーストラリアにニュージーランドと、政治的にも文化的にも極めて多様性のある地域が、いわゆる我々が「オセアニア」と一口に呼んでいる地域です。



（画像はウィキペディアより）

「オセアニア」は上図の通り、ポリネシア、ミクロネシア、メラネシアの3地域に地理文化

的カテゴリーとして分けることができます。上記 14 か国は概ねどこかの文化圏に属しており、その文化的差異は、例えば日中韓の違いをおそらく凌ぐものです。まず身体的外見が、日中韓のそれよりずっと違いますし、言葉や生活様式も当然異なります。

中でも日本から一番近い（東南アジアと大体同じ距離）のがミクロネシアであり、今回ご紹介するミクロネシア連邦（Federated States of Micronesia, 略称 FSM）という国はもちろんミクロネシア文化圏に位置する連邦国家です。上図で言えば、赤色のミクロネシア地域から西のパラオ、北のマリアナ諸島、東のマーシャルとキリバスを除いた地域が概ね FSM という国の範囲です。

ミクロネシアという地域名は知っていても、ミクロネシア連邦という国があることを知らない人は実は日本でも多く、その一番の理由は、まず世界地図上で「見えない」ことが大きいでしょう。後述する島々は、現地の主要な島であっても残念ながら世界地図上では小さくてほとんど見えません。また、地域名称と国名が同じということも、国家としての認知度が低い原因なのかもしれません。

とは言え、かつては日本による統治が行われていた時期もあり、歴史的にも文化的にも非常に関係が深く今でも親日的な人が多いこれらの島々は、日本にとって今も将来も絶好のパートナーであり、米中関係の複雑化によりこの地域が地政学的に脚光を浴びる今、その関係性はこれまで以上に重要になってきています。簡単なお紹介になりますが、少しでもこれらの地域により一層の関心を持っていただけましたらと思います。



パキン環礁（ミクロネシア連邦、ポンペイ州）

ミクロネシア連邦の陸地総面積は全部合わせても約 700 平方キロメートルで奄美大島とほぼ同じ、人口は約 11 万 3 千人（外務省 HP による）です。特徴的なのはこの広い領海域が西からヤップ州、チューク州、ポンペイ州、コスラエ州の 4 つの州に分かれていることで、それぞれが飛行機で数時間の距離にあり、同じ国の中でも全然雰囲気が違います。通貨は米ドルでおもな産業は漁業と農業、経済的にはアメリカの援助に大きく依存してきたことも確かですが、徐々に観光業などにも力を入れ、経済的自立への道を模索しています。

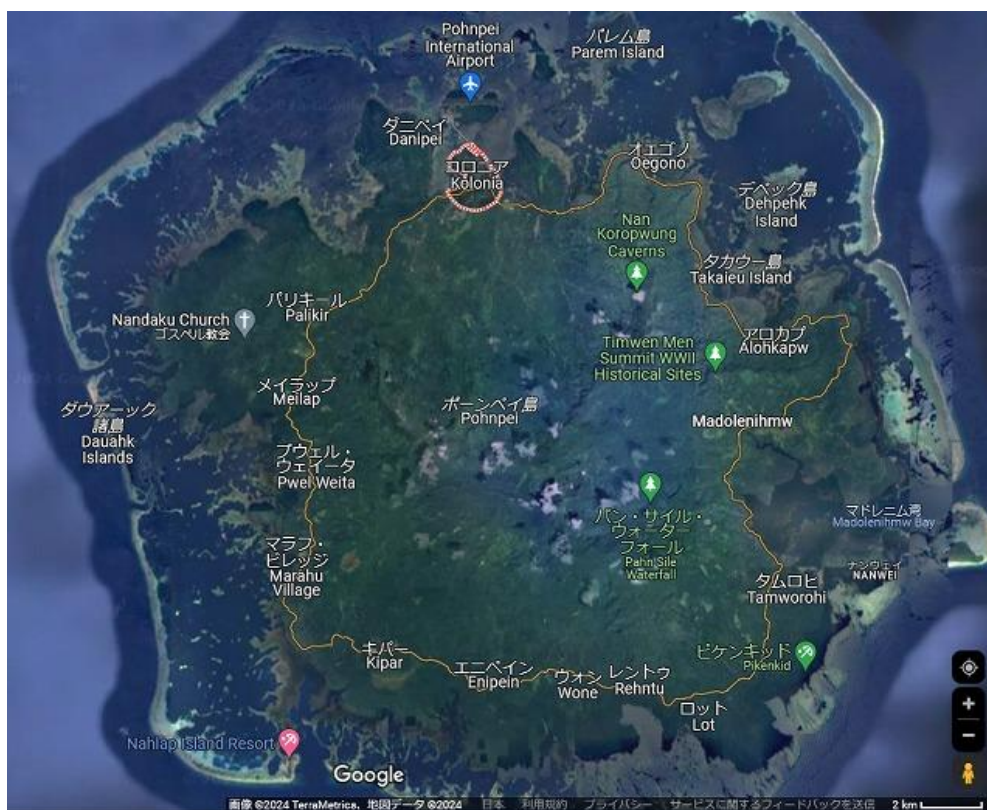
FSM への行き方は、グアムから米ユナイテッド航空（旧コンチネンタル航空の路線）がチューク、ポンペイ、コスラエ、マーシャル諸島のクワジェリン、同じくマジュロを経由してハワイのホノルルまでを結ぶ“Island Hopper”と呼ばれる週 4 便ほどのフライトがあり、グアムからホノルルまでの所要時間は 12 時間から 15 時間ほど、FSM 最東端のコスラエまででも 6 時間ほどかかります。日本から行く場合、ほぼこの Island Hopper を利用して行くことになります。



アイランドホッパーの飛行機（チューク空港にて）

それでは以下 FSM の 4 州それぞれについて、簡単にご紹介します。

●ポンペイ州（人口約3万5千人）



ミクロネシア連邦の首都が置かれている島がこのポンペイ島で、空港近くの最大都市コロニアから全ての訪問者は旅を始めます。町の道路は概ね舗装されており、学校やスーパー（日系的のものも多い。日本の大手ではなく、日本人の苗字を冠した日系人経営の普通の地元のスーパー）、病院など、ミクロネシアの“都会”の人々の暮らしぶりが良く分かります。



ある晴れた日のコロニアの町並み

飲食店は多くはないですが、ピザとかフライドチキンとか、あるいはラーメンとか、それなりのものは揃っています。やっぱり島へ来たならさっそく市場へ！捕れたばかりのカラフルで新鮮な魚や野菜が並んでいて飽きません。

島の周回道路は一周約 86 キロ、上図の通り島の内部は山林で、町や村はこの周回道路沿いにほぼすべてあります（太平洋地域ではよくあるパターン）。ここへ来たらず訪れたいのがポンペイで一番、いや、FSM 観光のハイライトと言ってもいいかもしれない「ナンマドール遺跡」！まるで長崎の出島のように大海にせり出した古代の巨石人工島遺跡です。



竜宮城のモデル?! 謎の遺跡、ナンマドール

今ではヤシやシダの木に覆われてジャングルの奥にひっそりと佇んでいますが、いつ頃誰によって建造されたのか、正確な事はほとんど分かっていません。一説には竜宮城のモデルではという話もあり、世界遺産（危機遺産）にも登録されています。

もう一つのランドマークが、コロニアのすぐ西にある「ソケースマウンテン」で、旧日本軍の陣地を通りながら、比較的簡単なハイキングで登れる 276m の山です。途中のビューポイントから眺める空港とコロニアの町は絶景です。体力と技術に自信がある人はその先の「ソケースロック」にも登れます。

地元の人々のナイトライフを体験するには、「シャカオ」バーがあります。シャカオというのはポンペイでの呼び方で、カバと呼ばれることも多く、いくつかの太平洋諸国で飲まれるのですが（FSM ではポンペイでよく飲まれ、チュークやヤップでは飲まれない）、コショウ科のカバの木の根を叩いてすり潰し、水を加えて濾した飲み物です。



シャカオ製造中

見た目はまさに泥水ですが、飲むとアルコールのような軽い酩酊作用があり、古来から伝統儀式の際などには重用されてきました。夕方になるとシャカオを作って皆で飲む「バー」が所々で開かれています（地元の人に聞けばシャカオを飲める所をきっと教えてもらえますが、衛生面や効能面も含めて自己責任です）。



これが太平洋地域のシャカオ（カバ）。飲むとほろ酔い気分

最後に、ポンペイは世界有数の多雨地域として有名で、滞在中スコール雨に当たらないことはほぼ不可能でしょう。朝晴れていても、傘を忘れずに。



● チューク州 (人口約3万6千人)



かつて日本の統治時代にはトラック諸島と呼ばれた所です。上図のように、太平洋の絶海の海域の中に現れる環礁とラグーン。かつて日本海軍の一大拠点となったことは無理もなかったのかもしれませんが。他州にも増して戦時中の日本との関わりが深いチューク州の中心は、州都ウェノやチューク国際空港があるモエン島（かつての春島）です。

現在ではチュークはアイランドホッパーがグアムを発って最初に止まる場所で、FSM の中では距離的に比較的訪問しやすく、ダイビングのメッカとしても知られています。州都ウェノはコロニアと並ぶ FSM 最大の都市で、多くの人々が職やビジネスの機会を求めて集まる場所であり、規模感は違えど都市としての役割と課題は大国や先進国のそれと変わりはないようです。ミクロネシア連邦はかなり治安の良い国ですが、チュークにおいては他州よりもやや高めの防犯意識を持つことが必要とされています。



チュークの町並み

訪問者（特に日本人）がよく訪れる「ザビエル高校」はミクロネシアの名門校で、はるかパラオやマーシャルからも優秀な学生が集まり、多くの有為な人材を輩出しています。この学校の建物は日本の馬淵建設が建てたかつての軍の通信基地で、まるで要塞のような堅固な造りになっており、米軍の爆撃弾の直撃にも耐えて今に至っています。2008年に馬淵建設が改修工事を行い、きれいな姿に生まれ変わりました。日本とミクロネシアの新たな友情の印となっています。

（馬淵建設の HP）

<https://www.mzec.co.jp/results/projectstory/story02/>



爆弾が直撃した屋根



強固で分厚い教室の窓

● コスラエ州 (人口約 6 千人)



穏やかな島時間が流れるミクロネシアの中でも、ひとときわゆったりとしている印象を持ったのがココスラエです。訪れる人は多くはありません。有名な観光地也没有。島を周回する道路はありますが、一周しておらず、海からのアクセスが必要な場所もあります。

宗教はFSM全体でキリスト教が浸透していますが、ココスラエは特にその影響が大きく、日曜日は皆静かに教会で礼拝したりして安息日を過ごします。手つかずの山野と輝く紺碧の海、便利なものも刺激的なものもありますが、素朴で親切な人々とふれあいながら、本当の島時間を過ごすことができます。

コスラエの象徴となっているのが「Sleeping Lady」と呼ばれる山容で、その名の通り横になった女性に見えませんか？（右の方が頭、真ん中よりすこし右に二つの“胸”があるのが分かります）



体力があればコスラエの最高峰 Finkol 山 (634m) にも登ってみましょう。往復でほぼ一日かかりますが、素晴らしい眺めが堪能できます。また上述のナンマドールとの関連性も指摘されているレル遺跡も訪れてみたいです。

驚いたのが、一日のんびり過ごして宿へ戻ると、おかみさんに「何時ごろあの辺にいたでしょう」と一日の行動がすべてバレていたこと（笑）。さすが、こういう島ならではの島民ネットワークに脱帽でした。そんなことをしているうちにきっと、地元の人目に留まって、夜の宴会に招かれたり、どこかへ遊びに行ったり、いつか住んでみたくなってしまうようなところかもしれません。

たまたまこの時は州知事の就任式の日で、地元の人に「お前も来い」とお呼ばれして参加

させて頂きました。たくさんの方が詰めかけて、小さな体育館は華やかに着飾った人が一杯で、はるばるポンペイの日本大使館からやってきた（であろう）日本大使も出席されていました。

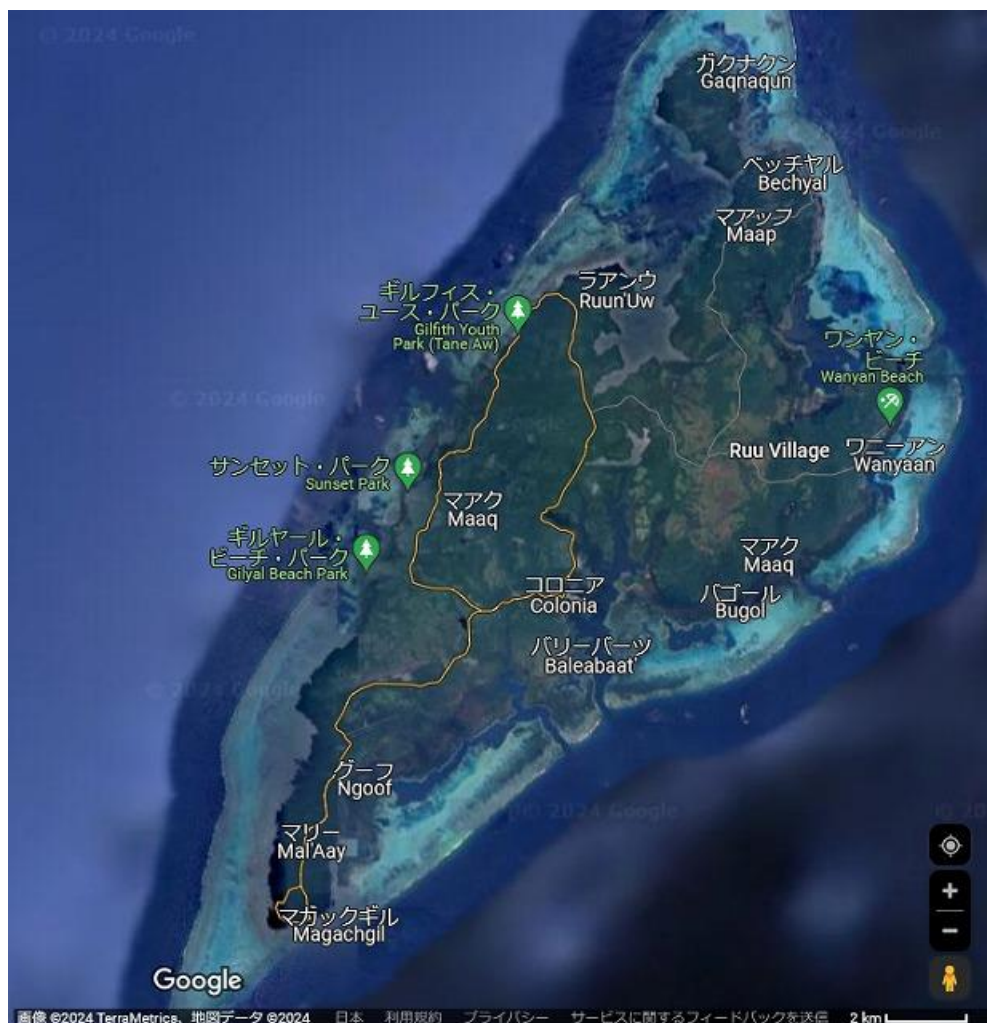


Finkol 山頂上からの絶景

名残惜しくも帰国の時がやってきましたが、この日はあいにくの荒れ模様。空港も何か穏やかでない雰囲気でしたが、チェックインのカウンター職員は、なんと前日夜まで一緒に飲んでいたお兄さん。昨日は片言の日本語で和やかに話しかけてきてくれたのに、今日は一転、全て英語の笑顔無しで「あなたは乗れない」とのこと。欠航ではないけど、離陸重量の関係で全員は乗れないということでした。かなりのレアケースです。

こういう場合は当然“上客”から優先的に乗れるわけで（上述の日本大使は乗れたようです）、この時はマイレージでタダ旅行だった私の優先順位が高いはずもなく、お兄さんの「仕事は仕事」という雰囲気もコスラエらしくないなあとは思いましたが、ある意味感心すべきことでもありましたし、四の五の言ってもこういう決定が覆ることはまずありませんので、週三便では予定日通りの帰国と出社は不可能、そしてこのすてきな島へのもうしばらくの滞在が確定した瞬間でした。そんなこんなで、何もないけど私には思い出深い島です。

●ヤップ州（人口約6千人）



FSM4州の中で最も伝統的な雰囲気や慣習を残す島です。上述のアイランドホッパーではなく、グアムからパラオへ向かう同じくユナイテッド航空の便がヤップを経由しますのでそれを利用して訪れます。

ヤップといえば何といてもストーンマネー（石貨）が有名です。現地では「ライ」と呼ばれるこの石貨、驚くことに現在でも価値を持って使用されており、結婚や新築など、大きな売買の時に使われるそうです（日常のパンや歯ブラシには米ドルが使用されます）。



ライと呼ばれるストーンマネー。重さ数トンのものも

こんな大きな貨幣をどうやって使うのかということが当然気になると思います。石貨には全て五円玉のように穴が開いており、これは運搬のために、中に丸太を通してゴロゴロ転がして運ぶ（運んできた）のだそうですが、現在使われる時は所有権だけが移転し、貨幣自体は基本的に動かさないとのこと。

また石貨もお金ですので、額面価値のようなものがあるのかどうか気になりますが、答えは Yes で、その価値は大きさでも重さでも色つやでもなく、この石貨がヤップに運ばれてきた時の苦難の物語によって決まるのだそうです。何百年もの昔、これらの石は何百キロも離れたパラオから切り出され、はるばるカヌーで運ばれてきたのでした。

一つ一つの石にその誕生のストーリーがあり、それが語り部によって何世紀も大切に受け継がれているということに太平洋文化の奥深さを感じます。



ここまで、文面の都合もありミクロネシア連邦という国と 4 つの州について簡単に紹介を致しましたが、かつてこの地域は日本とアメリカという大国の狭間で太平洋戦争の戦場となり、どこへ行ってもその遺構が残っています。大きな高射砲や戦車から、国を思い戦った先人たちが使い残した茶碗のようなものまで、様々です。

私の目に留まったものの一部だけですが、最後にまとめて写真を紹介します。我々は平和的なビジネス交流による社会産業の発展が目的ですが、これら地域はその地政学的位置関係により常に大国の意向に翻弄されがちな宿命を背負っており、その点は今も何ら変わっていません。

ビジネスとはいえ完全に国益を排除して考えるのはなかなか難しいため、この地域の国々とのお付き合いや商売が、単なる勢力争いの手段にならないための戒めとして、これらの遺構が日本だけでなく、関係する全ての国や人への物言わぬメッセージになればと思っています。



朽ち果てた戦闘機
(ゼロ戦?)
ヤップにて



観光案内所の横にある
戦車。かなり保存状態
が良い。
ポンペイにて



高台に据えられた
高射砲
ポンペイのソケー
スマウンテンにて



町中の慰霊碑
チュークにて



ブルドーザー？
コスラエにて